

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 25 日現在

機関番号：34315

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2009～2011

課題番号：21653047

研究課題名（和文） 戦後沖縄の雑誌メディアと戦争観をめぐる歴史社会学的研究

研究課題名（英文） Postwar History of Okinawan Magazines and Recognition on War

研究代表者

福間 良明 (Fukuma Yoshiaki)

立命館大学・産業社会学部・准教授

研究者番号：70380144

研究成果の概要（和文）：

本研究は、戦後沖縄の総合雑誌を可能な限り洗い出し、そこにおける戦争観の変容や位相差を検証することを目的として、進めてきた。戦後沖縄の雑誌メディアについては、これまでに系統的な整理すらなされていなかった。戦後の沖縄では、『うるま春秋』（うるま新報社・1949年発刊）や『月刊タイムス』（沖縄タイムス社・1949年発刊）、『世論週報』（沖縄出版社・1951年発刊）、『月刊沖縄』（月刊沖縄社・1961年発刊）など、多くの政治雑誌・総合雑誌が存在した。日本本土から週刊誌や総合雑誌が流入するなかで、これらの多くは淘汰され、その言説布置やメディア特性については、これまで顧みられることはなかった。本研究では、これらのメディア史を解き明かしながら、そこにおける戦争観の位相差や変容について、考察を進めた。

研究成果の概要（英文）：

This research focused on the history of Magazines on social science in postwar Okinawa, and examined transformation of recognition on war. Many magazines were published in postwar Okinawa, such as Uruma-shunju, Monthly Times, Yoron Shuho, Monthly Okinawa, though few researchers paid attention to the history of these media. I analyzed the discourses in these magazines and the social view-points on battle of Okinawa.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	0	700,000
2010年度	600,000	0	600,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	120,000	1,820,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：戦後沖縄, 戦争体験, 輿論, 雑誌

1. 研究開始当初の背景

2007年、歴史教科書の沖縄戦記述をめぐる、議論が大きく紛糾した。こうしたことから、戦後日本と戦後沖縄の戦争観のねじれを

解き明かすべく、戦後沖縄の政論メディアやそこにおける戦争体験についての記述の整理・分析を試みることにした。

2. 研究の目的

本研究では、戦後沖縄の総合雑誌を可能な限り洗い出し、そこにおける戦争観の変容や位相差を検証することを目的とした。本研究では、沖縄戦後雑誌史という未開拓の領域に踏み込みながら、そこにおける戦争観の位相差や変容を考察した。

3. 研究の方法

沖縄本島や離島部の雑誌資料を洗い出し、分析を行った。

4. 研究成果

戦後日本における言説変容に対し、沖縄ではいかなる議論の変化が見られたのか。本研究は、戦後沖縄の雑誌・出版文化史を洗い出しながら、その点について考察した。

終戦直後の沖縄は、日本本土から分断されて米軍の直接統治下に置かれた。その状態は、サンフランシスコ講和条約の発効（一九五二年）によって日本本土が独立したのちも続いた。その間、沖縄では、土地闘争（一九五〇年代半ば）や復帰運動（一九六〇年代）、復帰批判（一九七〇年前後）をめぐる輿論の高揚が見られた。そうしたなか、沖縄では戦争体験がどう語られたのか。そこにはいかなる力学が介在し、日本本土の場合といかに相違したのか。これらの問題について、時系列的に検証を進めた。

戦後沖縄の戦記史をめぐる主要な研究としては、仲程昌徳『沖縄の戦記』（朝日選書、一九八二年）や嶋津与志「沖縄戦はどう書かれてきたか」（『沖縄戦を考える』ひるぎ社、一九八三年）、屋嘉比取「戦後世代が沖縄戦の当事者となる試み」（『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす』世織書房・二〇〇九年）などがある。いずれも沖縄戦記史が広く見渡しているが、「何が書かれていたか」への関心がつよい一方で、それらが書かれ、読まれる社会状況の分析には重点が置かれていない。また、日本本土の議論との共通性や相違点、あるいはそれらが沖縄での議論に与えた影響についても、十分に考察されているわけではない。それに対し、この第一部では、日本本土の戦記出版史や戦争体験論史と対比しながら、沖縄における戦争体験論の変容プロセスを考察した。

とはいえ、ここでは、体験論史を網羅することを目的としたわけではない。むしろ、それが生み出される構造自体が、日本本土といかに異なるか、その点を明らかにすることが、第一部の主題である。戦後の本土と沖縄は、まったく異質な政治状況を辿ってきたばかりではない。知識人の位置やメディア環境も決定的に異なっていた。そのことにより、戦争や戦争体験をめぐる議論はもとより、それを生み出す磁場も、本土と沖縄とは大きく

異なっていた。そうした議論を生み出す構造を明らかにすることが、本研究のめざすところであった。

このことは、分析対象の選択とも関わる。戦争体験については、多くの戦後沖縄知識人が論じており、そのすべてを網羅しようとするれば、かなりの紙幅を要することとなる。ここでは、そうした作業よりはむしろ、戦争体験論を生み出す社会的な磁場の変容を考察するうえで代表性を有する論者に焦点を当てながら、議論を進めた。

戦後沖縄思想史を扱ったものとしては、鹿野政直『戦後沖縄の思想像』（朝日新聞社、一九八七年）、小熊英二『〈日本人〉の境界』（新曜社、一九九八年）などがあるが、沖縄知識人の戦争体験論を通時的に俯瞰し、それらの議論が生み出される構造や磁場を検証したものは、意外に少ない。大城立裕や池宮城秀意など個々の知識人の戦争体験に言及した論考はあるものの、戦後沖縄における戦争体験論の全体を見渡し、その系譜をまとめたものは、皆無に近い。本研究では、それを十全に描くことはできなくとも、まずは主たる論者の議論を検証しながら、それを日本本土の議論とも対比し、沖縄戦論が生み出される力学の一端を浮き彫りにしたいと考えている。大田昌秀や安仁屋政昭、石原昌家、新崎盛暉らの議論もさらに掘り下げて考察する必要はあるだろうが、それは今後の課題とし、まずは、沖縄で戦争体験論が生み出されてきた磁場を素描することを、ここでの目的とした。

こうした問題意識をもとに雑誌史・雑誌言説および関連する出版文化史から明らかになったのは、以下の点である。

沖縄では、一九五〇年代初頭に、沖縄タイムス社編『鉄の暴風』（一九五〇年）、仲宗根政善『沖縄の悲劇』（一九五一年）、大田昌秀・外間守善編『沖縄健児隊』（一九五三年）といった戦争体験記が発刊され、第一次沖縄戦記ブームの様相を呈していた。その背後にあったのは、旧日本兵らによる沖縄戦記への不快感であった。

古川成美『沖縄の最後』（一九四七年）・『死生の門』（一九四九年）や宮永次雄『沖縄俘虜記』（一九四九年）は、あくまで日本兵の沖縄戦体験記であっただけに、沖縄住民が体験したものとは大きな相違があった。石野径一郎『ひめゆりの塔』（一九五〇年）など沖縄戦を題材にした小説もあらわれたが、これも事実に基づくものではなく、「ひめゆり」の少女たちの悲哀と美談が際立つきらいがあった。それは、地上戦のなかを逃げまどいながら、表現しがたい煩悶や自責の念を抱いた仲宗根政善にしてみれば、空疎なものにし見えなかった。日本本土での沖縄戦記発刊をめぐるこうした違和感が、沖縄での体験記刊行につながった。

もっとも、本土の戦記ブームに沿う形で発刊された沖縄住民の体験記も見られた。GHQの占領終結に伴い、日本本土では占領軍批判や東京裁判批判など、それまで抑え込まれていた言説が一気に噴出した。そのなかで、戦記出版が盛り上がりを見せていたが、『沖縄健児隊』（一九五三年）はこうした流れのなかで、戦記出版大手の日本出版協同から刊行された。

しかし、そこにも、本土と沖縄のギャップを見ることができた。同書が戦記ブームのなかで発刊されたとはいえ、そこには沖縄住民に対する日本軍の暴力が記されており、戦時のあり方を肯定したり懐古したりするものではなかった。また、『沖縄健児隊』が沖縄メディアで評されるうえでは、「沖縄が払った犠牲」が強調されるむきがあった。だが、これも、単に日本に対する沖縄の献身や日本ナショナリズムへの共感が主張されたわけではない。むしろ、そこには本土復帰の願望があった。それは裏を返せば、一九五二年のサンフランシスコ講和条約発効に伴い、沖縄を切り捨てる形で独立を果たした本土への違和感に根差していた。

体験の語りを生み出す磁場の相違は、その後も顕著に見られた。奇しくも、一九六〇年代末は、日本における戦記ブームであったのと同時に、沖縄戦記や被爆体験記の発刊もひとつのピークを迎えていた。しかし、議論を突き動かしていたものは、それぞれ異なっていた。

当時の日本の戦記ブームの要因として大きかったのは、世代間の軋轢であった。拙著『焦土の記憶』序章で述べたとおり、戦中派世代は戦後派・戦無派世代の批判にさらされていた。戦中派は戦争体験にこだわり、しばしば安易な政治主義への流用を嫌悪した。それに対し、反戦・平和運動への志向がつかった戦後派・戦無派には、戦中派が自らの体験を占有し、それを振りかざしているかのように映った。それゆえに、彼らは戦中派の「被害者意識」を批判し、若い世代の観点から戦争体験を流用することを主張した。こうした状況に由来する戦中派の疎外感や、戦中派アイデンティティの模索につながった。そのことは、戦友会創設件数の伸びにつながると同時に、『あゝ同期の桜』（一九六七年）等の遺稿集の相次ぐ発刊をも促した。

それに対し、沖縄戦の発刊を突き動かしたのは、沖縄返還のあり方に対する反感であった。一九六〇年代後半になって沖縄返還は現実味を帯びるようになったが、同時に広大な米軍基地が引き続き残されることも明らかになった。この事態は、それまでの「祖国復帰」の幻想を打ち砕き、日本と沖縄の関係を問い直すことにつながった。そのことが、戦後沖縄の起点である沖縄戦体験への社会的

関心を生みだした。沖縄本島の南部・中部・北部、あるいは離島で、住民はいかなる体験をしたのか。そこで、日本軍と住民はいかなる関係にあったのか。こうした問題意識のもと、膨大な聞き取り調査や手記収集が進められ、『沖縄県史—沖縄戦記録1・2』（一九七一年・七四年）等の成果が出された。

そこでは同時に、沖縄の戦争協力やナショナリズムの問題も批判的に検証されることとなった。戦時体制下の沖縄では、学校教師たちは軍国主義教育を熱心に行ない、生徒たちに聖戦熱を焚きつけた。地元有力者のなかには、大政翼賛会沖縄県支部の幹部も少なくはなく、当然、彼らは率先して戦争に協力した。沖縄戦が始まると、住民はしばしばスパイ容疑で処刑されたが、それは日本軍が手を下したばかりではない。護郷隊少年兵を含む沖縄出身兵が告発や詰問に関わることも珍しくはなかった。沖縄戦体験の掘り起こしが進むなか、これまでほとんど議論されてこなかった沖縄の戦争責任や「皇民」としてのナショナリズムの問題が問い直されることとなった。

これらの言説の背後には、祖国復帰運動への批判もあった。復帰運動は日本への帰属をめざすものであっただけに、日本を美化して語る傾向があった。むしろ、それは苛烈な米軍統治からの脱却を意図したものではあったが、そのゆえに、沖縄に対する日本の戦争責任、あるいは沖縄の戦争協力が復帰運動のなかで焦点化することは少なかった。また、復帰運動を主導したのは教職員たちであったが、それは、生徒たちに「皇民」としてのナショナリズムを説いた戦前期の教師たちに重なる面もあった。沖縄の戦争責任を問うことは、復帰運動がはらむ問題性を洗い出すことでもあったのである。

上記拙著第三章でも述べたように、この時期の沖縄戦記発刊は、以前とは比較にならないほどの大きな伸びを見せていた。それも裏を返せば、沖縄返還や復帰運動への不快感が、いかに沖縄戦体験の発掘を突き動かしていたのかを物語っていた。

これらの議論の構造を考えるうえで、そこでの体験と政治の関係性を読み解く必要がある。そして、それは世代の問題とも関わるものであった。

大城立裕は復帰運動や反米軍闘争に対し、やや距離をとるところがあった。そこにあったのは、「戦中派として軍国主義に染まってしまった悔しさ」と「軍国主義の教育のなかで『自分の頭で考える能力』を去勢されていた」という思いだった。戦時期の東亜同文書院で学び、中国戦線に出征するなかで、大城は「大東亜共栄」の理念にいかかわりを感じ取るようになった。他方で、沖縄陥落の報に接したときには、「日本人」として「沖縄

の仇を討つことを思った。こうしたアンビバレンスは、戦後の大城に「自信の欠如」をもたらした。しかし大城は、それにこだわりながら、「一方だけから見るのは危ない」という「戦中派としての用心深さ」を意識するようになった。かつての思考の揺れ動きを絶えず振り返りながら、大城は、既存の政治理念に頼るのではなく、「自分の頭で考え」ることを重視するようになった。大城が、戦後の復帰運動や学生運動から距離をとろうとしたのも、そのゆえであった。

このような姿勢は、本土の同世代知識人にも共通していた。拙著序章でもふれたとおり、安田武は、「戦争体験の意味が問われ、再評価され、その思想化などということがいわれるごとに、そうした行為の目的のすべてが、直ちに反戦・平和のための直接的な『運動』に組織されなければならぬ、あるいは、組織化のための理論にならねばならぬようにいわれてきた、そういう発想の性急さに、私はたじろがざるを得ない」と述べ、戦争体験を反戦運動や安保闘争に安易に結びつけることを嫌悪した。そこには、自責や恥辱といった複雑な思いが交錯した戦争体験にこだわり、その語りगतさの前に苦悶する心情があった。

だが、そうしたスタンスは下の世代の強烈な反感を招くこととなった。学生運動や反戦運動に熱をあげる戦後派・戦無派世代にとっては、安田らの議論は、彼らの運動の有効性を切り捨てるかのように思われた。また、体験の語りगतさにこだわる戦中派の姿勢は、若い世代にしてみれば、体験を振りかざし、彼らを威圧しようとしているようにも感じられた。

同様のことは、沖縄でもいっくら見られた。一九五〇年代半ばの沖縄では、米軍の土地収奪に対抗し、島ぐるみ闘争が高揚した。他方で、第一次・二次琉大事件に見られるように、学生の反米軍闘争が軍政府によって弾圧される事件も頻発していた。そうしたなか、若い世代は、大城立裕のスタンスに不快感を抱いた。政治主義に懐疑的な大城の議論は、彼らにとって、「現在の沖縄の社会的矛盾との闘いを骨抜きにしよう」としているように感じられた。

しかしながら、一九六〇年代末の沖縄戦記発刊や沖縄戦体験論の隆盛を支えたのは、岡本恵徳、新川明、大城将保ら、戦後派世代の知識人であった。それは、わだつみ像破壊事件（一九六九年）に象徴されるように、戦争体験への拒否感を抱きがちであった本土の戦後派・戦無派世代とは、かなり異質であった。

沖縄の戦後派知識人たちを、戦争体験の収集に向かわせたのは、先にも述べたように、沖縄返還や復帰運動への反感、すなわち「反

復帰」の輿論であった。日本に寄り添うことを求め続けてきた復帰運動を批判し、日本との関係を問いただそうとする意思の延長で、彼らは、戦後沖縄の起点としての沖縄戦体験に関心を抱くようになったのであった。

とはいえ、岡本恵徳、新川明、大城将保らが「反復帰」を考えるようになったのは、六〇年代末の沖縄返還問題を契機とするわけではない。むしろ、六〇年安保闘争の前後に日本本土で暮らした経験が、そこには関わっていた。日本本土に渡る以前の彼らにとって、本土は民主主義と憲法九条が適用されている憧憬の地であった。しかし、本土に渡航してみると、彼らは本土に対する違和感を抱くようになった。六〇年安保闘争が高揚している一方で、沖縄が切り捨てられている——そうした思いを彼らは抱いた。本土への憧れが強かっただけに、裏切られたという感覚も大きかった。そのことが、「祖国復帰」という沖縄での政治規範を疑うことにつながり、ひいては、日本 - 沖縄の関係性を問いただすべく、その起点としての沖縄戦体験に関心を向けるようになっていった。

他方で、彼らが本島南部の激戦を体験していないことも、そこに関わっていた。地上戦となった沖縄では、日本本土とは異なり、戦後派世代の者たちも戦場に投げ込まれた。男女の学徒隊のように兵士・軍属として戦場に送られた者も少なくはなく、また、そうでない者たちも、地上戦のなかで逃避行を強いられた。しかし、岡本恵徳や新川明、大城将保らは、戦争末期を離島や本土で過ごしたため、それらの経験を持ち合わせてはいなかった。そのことは、戦火で命を落とした同世代の者たちに対する「生き残ったことへの負い目」を抱かせることとなった。

この感覚は、日本本土の戦中派世代に近いものであった。橋川文三は「死んだ仲間たちと生きている私との関係はこれからどうなるのだろうかという、今も解きたい思い」をしばしば語り、安田武も「アイツが死んで、オレが生きた、ということが、どうにも納得できないし、その上、死んでしまった奴と、生き残った奴との、この“決定的な運命の相違”に到っては、ますます納得がゆかない」ことにこだわっていた。その点で、沖縄の戦後派世代は、本土の戦中派世代に重なる側面が見られた。

しかし、同時に彼らは体験を相対化する視点も持ち合わせていた。先にふれたとおり、彼らは沖縄戦体験を掘り起こし、それについて論じるなかで、沖縄の戦争責任や「皇民」としてのナショナリズムの問題についても言及していった。それは、「日本」と「沖縄」を二項対立的に捉える議論とは大きく異なっていた。本島南部の激戦を体験をしていなかったがゆえに、体験そのものからときに一

定の距離をとり、多角的に捉え返して行こうとする姿勢が、そこには見られた。

その意味で、沖縄で戦争体験論が紡がれる力学は、日本本土の場合とは大きく相違していた。体験への関心と世代の関わりは、本土と沖縄ではしばしば食い違いが生じた。そして、その齟齬の断面には、両者のあいだに横たわるヒエラルヒーが浮かび上がっていた。

以上が、戦後沖縄のおもに雑誌史の検証を通して、明らかになったことである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 福間 良明「戦後沖縄と戦争体験論の変容 (2・完) : 『沖縄の悲劇』『沖縄健児隊』の刊行」『立命館産業社会論集』, 46(1), 2010年, 173-191頁, 査読無
- ② 福間 良明「戦後沖縄と戦争体験論の変容 (1) : 終戦から『鉄の暴風』発刊まで」『立命館産業社会論集』, 45(4), 2010年, 31-44頁, 査読無

[学会発表] (計0件)

[図書] (計1件)

- ① 福間良明『焦土の記憶：沖縄・広島・長崎に映る戦後』新曜社, 2011年, (第一部「戦後沖縄と戦争体験論の変容」), 79-217頁

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

福間 良明 (Fukuma Yoshiaki)
立命館大学・産業社会学部・准教授
研究者番号：70380144